

京大天皇事件のいっ

今西

— (小樽商科大学特任教授)

— 歓迎されなかった
昭和天皇

前回、三重県の実巡幸への反対
ビラを紹介したが、一九五一年一月
の昭和天皇の京都巡幸は、新聞報道
などと違って、実際にはあまり歓迎
されていない。『特審月報』によると、
一月三日付けの『神戸新聞』には、
朝鮮人団体が「十一月の天皇陛下閣
下巡幸を機会に、けっ起する気配が
濃いので国警大阪管区本部では厳重
警戒に当たることにした」という記
事が載っている。

一月二日付けの『毎日新聞(大
阪版)』には、「水谷(長三郎引用者)
代議士襲撃は計画的犯行」として、「京
都の国際青年デモの暴行事件につき、
京大生などの逮捕状を請求。追求中
の京都市警々備課では、十日首謀容
疑の京大文学部学生小畑哲雄(二五)
を京大前で逮捕」し、「水谷代議士宅
暴行事件はあらかじめ計画的であっ
たことがわかり、共犯学生数名の逮
捕状を請求した」とある。この事件

での小畑氏の逮捕は、本誌で小畑氏
も書いているように、フレームアッ
プである。

そして、同日付けの同紙によると、
「拒否ビラ強制撤去へ」として、「十二
日朝陛下の京都市役所巡幸に際し、
同市職員組合はお出迎えもせず、玄
関の労組宣伝掲示アジビラなども一
切撤去しないと頑張り続けており、
高山(義三引用者)市長の警告に
もその態度を変更することなく、十
日夜は徹夜で組合員数名が掲示板に
座り込んだ。一方十一日朝十一時か
ら国警県本部で田中警察部長と狭間
市職員局長とが会見、ビラ撤去問題
について協議した結果、組合側があ
くまで撤去に応じない場合は、強制
撤去の態度を決定した」。

翌二日、「午後三時、市理事者側
が市警から警官一個小隊の出動を求
め強制退去を行った。これに対し職
組執行委員会は善後策を協議、お出
迎え拒否」を確認している。それに
加えて、「同夕五時頃、木俣、小西、
梅林の民統三議員は高山市長を公舎
に訪れ面会の上抗議を申し込んだが、



市職の壁新聞事件を報じる京都新聞
(51年11月11日)

物わかれのま、午後七時退去し」て
いる。

一方、同日、「陛下巡幸の沿道一帯
に朝鮮解放救援会その他の労組」が、
「ビラの天覧戦術」を行うと京都市警
は聞き込み、「十一日朝、管内各署に
対し広告条例に基き適切な処置を講
ずるよう」に指令している。「市警側
の根拠となったのは、十日夜朝鮮解
放救援会が府都市計画課に「朝鮮停
戦問題」など、十一種類一万五千枚
のビラ貼付の申請を行い、許可をう
けた事実が基礎となっている」(『大
阪新聞』)。

このように騒然としたなか、昭和
天皇は京都に来るのだが、事件の直
後に出された、日本青年祖国戦線戦
線全国委員会の『青年祖国戦線』の
一八号は、「京大事件」特集を行って、
この頃の様子を書いている(榎並公
雄氏所蔵、以下特に断りのないもの

は同氏所蔵)。

同誌はまず、巻頭言の「京大事件
にさいし全日本の青年に訴える」の
なかで、「島津製作所では、賃上げ
要求を闘っている労働者のひどい生
活には見向きもしなかった会社側の、
天皇を迎えるため補修費は五百万円
にのぼり、十一日夜、市警が市役所
の職員壁新聞を、むりやりもちさり、
京都大学には、同学会執行委員の逮
捕、文化祭の禁止、原爆展開催の妨
害などがつづいた」と、その陰悪な
雰囲気を与えている。

同誌の「京都に捲き起こった平和
の歌声」というルポでは、京都の市
民が、いかに天皇を迎えるのに、無
関心であったかがよく描かれている。
作者は、「あの街この道に感激は溢れ
て」「京都全市は歓呼に沸いた」とい
う一三日の夕刊各紙の報道を批判し
て、市井の人たちの声を聞いて回る。
五〇年配の男性の「天皇は何とかか
んとかいっても戦争犯罪人じゃない
ですか」という声を聞き出している。
またルポでは、労働組合、学生たち
は、「特に京都で平和擁護運動の中心
となっている京大、島津製作所、飯
野産業に巡幸することに、その目標
が端的に現れており「強い平和運動
の鎮撫のためではないか」(『学園新
聞』一月二日)」という主張も紹
介している。このルポには、一二日
の天皇事件の現場報道も書かれてい
るが、紙数の関係で省略する。

二事件は計画的か 自然発生的か

また『特審月報』に戻るが、一月一日付けの夕刊『フクニチ』には、「黨員が京大生を指導、天皇制打倒運動を企図」として、「取調べ当局の情報によれば、天皇関西御旅行前の十月末、日共関西地方委員会から「天皇巡幸に対する闘争」指令が出ていることがわかった」とする記事が載っている。この一〇月末の指令は未見であるが、前回紹介した「宮内庁行幸啓 昭和二十六年 総理府公文卷十四」（国立公文書館所蔵）には、次のような文書がある。

昭和二十六年十一月二十日
法務府特別審査局(調) 日共府
委緊急通達(二六・一一・一六)
「全党は京大の英雄的大闘争を支持せよ」要旨
一、京大を中心とする自由を守る斗いは米帝(アメリカ帝国主義—引用者)及び吉田(茂—引用者)を中心とする反動勢力に大打撃を与えた。
二、労組の実力斗争を強化して京大に集中した敵の刃を味方の主勢力である労働者の斗いに移す。
三、敵は事件をデッチあげる可能性がある。幹部の防衛に注

意せよ。

これは事件後の京都府委員会の通達であるが、「二一・一四 大阪で関西地方ビューローが開かれ、当面の斗争方針を決定した右方針に関する通達を入手している」として—その要旨—、十一月斗争の勝利、京大の斗争は偉大で英雄的であった。二、京大事件を全国的に拡大し、国際的問題に発展せしめよ。三、水長(水谷長三郎—引用者)は実力で粉砕させた四、自由と平和を守る斗いは実力以外にない。ここに新綱領(五一年綱領—引用者)の精神がある。

もちろん法務省特別審査局や警察、政府などは京大天皇事件に対して、共産党の「陰謀」説であった。

これに対して、事件の当事者たちは、「偶発」性を強調している。京都大学職員組合特別調査委員会の『京大天皇事件調査報告』(一九五一年二月廿日)という文書がある。ここではまず一月六日に、市警本部長および川端警察署長と京都大学学長、補導部長、学生課長との会見が持たれ、一二日の天皇の訪学について、次のように取り決められたとしている。

一、交通整理の為、一ヶ分隊(制服一一名)及び天皇の身辺警備の為、私服若干名(約二〇名)



1951年11月12日、京大を訪れた天皇に学生たちは公開質問状を発し「平和の歌」で迎えた(京大吉田分校正門前)

を当日学内に入れること

二、奉迎線は大学当局が定め、学生の行動に対する責任は大学がとること

三、学外の奉迎人を奉迎の列に加えないこと

四、大衆の行動が騒擾的となり、大学当局による奉迎場内の整理不可能の段階に達した場合、この騒擾を誘起せしめた者の氏名が明らかであるよう、予め手段を講ずるといふ形態で、大学当局は警察当局に協力すること。

報告書は、「この協議の際、天皇来学時に何らかの歌が歌われ、プラカードが掲げられることは、既に予想さ

れていた」とする。しかし、これらの行動に対する具体的な対策は、「特に問題」にはならなかったとしている。ただ、警察当局は一月七日の「水谷氏宅投石事件、天皇に対する同学会の質問状呈出、更に十一月九日同学会が大学当局に対して行った天皇来学当日の警官入構拒否により、状況を不穏と判断し、十一月一〇日頃(日は不明確)臨時予備隊を編成した。

一二日当日は、「警察当局は、同学会が学長の面会を拒否された事実及びプラカードの作成などの情報により、情勢悪化と判断し」、その対策を市警当局から川端署長に電話で伝達し、署長は補導部長に連絡した。その場合の「最悪事態」とは、「御通路

に学生が座り込む等の事態」であったが、大学当局は、その予想を否定している。しかし、「来学当日の京都大学警備の最高指揮者は総務部長であった」が、警察は「前掲の予備隊として四〇〇人を近衛中学に待機せしめた」。

報告書は、「正門守衛」の証言として、「午後一時八分頃、同学会が分校（本部構内真南隣、元三高）にて開催予定し、大学当局にその許可を申請中であった原爆展が不許可になった為、二〇名ばかりの学生が、この旨を分校にて一般学生に報告の後、喚声をあげて突然東側警備線南端に現われ、西方向に移動し始めた」とし

ている。この「学生集団の挑発」については、東側を警備していた職員「の「全て、該契機が不明である」という証言を引きながら、「我々は、現在、学生の集団行動を確かに否定し或は確かに肯定する事実を有していない」という慎重な結論に達している。

しかし、「一時一八分、四本のプラカードを所持した数名の学生が、時計台東側に現われ、西側の植込みに位置した」という「同学会の計画性」が云々される「プラカード」問題については、「天皇来学に際してプラカードを掲げようという何らかの議論は」、同学会でも、「プラカード所持者である文学部学生の所属する

文学部自治会」においても、「正式の議論」をしていない。しかも、「プラカードは、その時作成されたものではなく、「国際青年デー」（一月七日）用として放置されてあったプラカード四本を当日数名の学生が運んだ」ものであった。

天皇が一時二〇分に来学すると、「本部車寄せの東側から、多数の人に由る『平和を守れ』の歌声が聞こえてきた」。しかし、NHKのアナウンサーも証言しているように、誰も「正門から本部までの通行を妨げられていない」。奉迎の人びとが車を「包囲」したことも、「奉迎人最前線が或いは時に自主的に後退している事実」から見ても、「一定の行動意欲をもたない単なる群衆の行動であったことを物語っている」としている。ここでも「同学会委員の若干名」は、必死に「来迎人に後退すべく指示」している。

この時刻に、「警察のパトロールカーが、大学の命令だ、解散」と放送した」が、「奉迎人は、彼等に発せられた「解散」なる用語の意味を理解することが出来なかった。「この放送は、事務局長の指示により、大学事務職員によって行われた。この放送の終了後直ちに数十名の武装警官が入構し来った。以後、武装警官は数回に亘って入構し、場内整理に当たった。最後の警官隊入構後、天皇は踵を接するが如く本部を出て、

出門した」。

報告書は、「天皇来学前後に発生した事態は、統一貫した意図に統率された秩序ある集団の行動がもたらした事態ではなく、群衆としての行動がもたらした事態であった」と結論づけている。私もまた、吉田分校と文学部の一部の学生の「扇動」はあっても、一二日の行動は自然発生性の強い民衆運動であったと考えている。しかし、警察やメディアは、これを大きく取り上げ、国会でも学長から青木宏同学会委員長まで喚問して、大事件に発展する。そして、水谷事件で留置されていた小畑氏ら八名の同学会役員が、みせしめ的に処分されるのである。

ここでも私が呆れたことのひとつは「天皇行幸に混乱が起ったことについて、京大当局は十三日、学部長会議を開き、さらに十四日朝から京大清風荘で補導会議が開かれた。この会議はCIC、CIEはじめ、斉藤国警長官、法務府高官の監視のもとに行われ、更にこれらの珍客のために山海の珍味をととのえて開かれ、同学会の解散、学生の処分を決定（している）。

いかに占領下とはいえ、京大の補導委員会が、警察やCICの監視下で開かれ、そこで学生の処分が決定されていることである（前掲『青年祖国戦線』、他）。当時の日本の植民地的な状況を反映している。